

子どもの道徳

特集 ■

道徳の授業が変わる—「ゆたかな心」の「発展」を考える



85
光文書院

●分水嶺

◇雪国から

あおやぎひろ江…… 3

●連載／教育のひろば

◇教育のパラダイム転換を考えよう

岡田匡令…… 4

●特集／道徳の授業が変わる—『ゆたかな心』の「発展」を考える—

◇「発展」を新設した理由と活用の方法

新宮弘識…… 6

◇「発展」—豊かな学びの広がりを期待して ……………

〈インタビュー〉 上杉賢士…… 10

*「発展」は体験的に学ぶことの可能性を広げる〔低学年〕

福田有児…… 11

*さまざまな「発展」のバリエーションと可能性〔中学年〕

加藤宣行…… 14

*将来の夢やキャリア形成への発展も可能〔高学年〕

大槻純子…… 18

●連載／わたしの提言

◇道徳的価値を見出す視点を家庭にも伝えよう

渡邊達生…… 22

●連載／研究会紹介〔上北地方小学校教育研究会道徳部会〕

◇誰にでもできる道徳の授業をめざして

沢田真也…… 24

●連載／道徳の授業—Q & A—

◇授業の多様化について

山内良夫…… 26



あおやぎひろ江先生 ▶『こどものとも』(2005年6月号／福音館書店)に「ななちゃんの たんじょうび」を取り上げていただいて喜んでいます。次作は、雪の場面を盛り込んだ「ゆきが いっぱい ふりました」という作品を予定しています。



加藤宣行先生 ▶1年前から小型犬を飼い始めました。喜怒哀楽を体中で表現するしぐさに、私を見つめる表情に、心を感じます。同じ哺乳類として相通するものがあるのでしょうか。犬を見ながら、心って何だろうと考える今日このごろです。



岡田匡令先生 ▶淑徳大学大学院国際経営・文化研究科長。現在、目黒区教育委員をお務めになるとともに、日本経営会計学会会長、日本経営実務学会名誉会長、国際コミュニケーション学会会長等、各種委員会の会長としてご多忙の毎日です。



大槻純子先生 ▶私の勤務校は文部科学省の「心に響く道徳教育推進事業」の指定校であり、道徳教育を研究し始めて2年目を迎えます。初任のころから道徳教育を一から学ばせていただき、道徳教育の奥深さとおもしろさを日々実感しています。



新宮弘識先生 ▶昨年度も道徳教育研究に取り組んでいる多くの学校を訪問。子どもが変わる前に先生方が変わられていることが大きい。教師が変わると、学校の全教育活動が変わるからである。教師の人間力の大切さを痛感するこのごろである。



渡邊達生先生 ▶昨年12月に、韓国の学会で研究発表をするという機会がもてました。ところで、最近、乙姫様が浦島太郎に持たせた玉手箱の意味に、やっと気がつきました。詳しくはインターネットのGoogle、「渡邊達生の研究室便り」で。



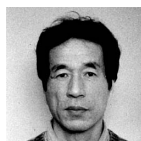
上杉賢士先生 ▶昨秋、全国各地の公開研究会で多様な授業を参観。注目すべきは、「キャリア教育」を意図した道徳授業が目立っていること—「キャリア」とは、職業や進路というより、むしろ生き方の問題ととらえればこれも納得できる話です。



沢田真也先生 ▶地方の国語部会にも所属しています。道徳教育の中での「情緒力」と、今、国語教育でいわれる「高次の情緒力」との違いを自分の中で明確にしたいと思っています。日々のストレスは、サッカー観戦などで発散しています。



福田有児先生 ▶今年度は、5年生の担任をしています。今年のくらしの軸は、コスモス栽培です。秋、そよかぜにゆれる可憐な花々は、子どもたちと学校内外のさまざまな人とのさわやかな出会いを誘い、心通わせる喜びを教えてくださいました。



山内良夫先生 ▶特別支援教育の研修を受講中。次年度からの、集団生活・集団学習の枠におさまらない児童への校内支援体制はどうあるべきかを確立する急務が待っています。普通学級と特殊学級のボーダーラインの意味合いも再確認中です。

◆◆分水嶺◆◆

雪国から

児童文学者 あおやぎ ひろ江

屋根をたたいていた雨の音がふっと消える。
(え? どうしたの?)

と立ち上がって外を見ると、
(あ! 雪に変わったんだ……)

しばらくそのまま、ぼさぼさと落ちてきては、地表でさっと溶けてしまう様子を見つめる……。

毎年迎えるこの時は、何歳になっても感動です。間違いなく厄介ものなのに、どこかでずっと会う日を待ちつづけているもの……。

小さかった頃、それが朝だったりした時はもう格別でした。何しろ前日までじめじめと暗かった景色が、その日からは世界中が純白。まして、枝から落ちる雪が朝日にキラキラと輝いていたりしたら。チョコボチョコボと猫の足跡。スズメが電線でおくんとふくらんでいる様子。

そしていよいよ深く積もると、細い道の両側に顔を押しつけて、友だちと鼻の高さを比べたり、

「ム、ツキ、ヒ、ヒ、オテテコ、テン、テンと書くと“熊”という字になるんだよ」

と黒板代わりにしたり、

「大人の人たちは働いているんだから、道を譲っていただいてはいけないよ」

と教えられていて、出会いそうになると急いで雪を踏んでも、大抵は先に道をあけてもらってしまっていたり……。

やがて、豊作や安泰を祈る「だんごさげ」「おさいと焼き」が終わると、私たちは小川の岸や日当たりの良い土手をスコップでつついて、真っ黒に腐葉土化した土の中に、ふっくらと、光るような黄緑色を見せているフキノトウを探し出す……。

雪の積もらない所に住む人たちは、冬はどんな過ごし方をするのだろうか。

(麦を踏んだりとか、風揚げとか……)

と想像してみるけれども、ちょっと、「雪のある方が、年に一度、心にも白いページをつくるようで、その方がいいよ」などと言ってみたい気もする。

でも、現実には実際厳しくて、米沢では近年マンションの建設が盛んです。

(人口が増えている訳でもないのに、誰が入るのだろうか)

と思っていたら、息子や娘を遠くへ送り出した老夫婦が、自宅を処分してそこへ移るのでした。理由は勿論、雪かきや屋根の雪おろしが身体に過重になって、といって、住み慣れた土地は離れ難くという訳です。

そういえば、我が家もそのコースになりそうなのですが、それなら、一日も早く雪囲いや雪かきをしないでよい生活の方がいいのではと考えると、いやいや、それはやっぱりギリギリまでこの雪囲いや雪かきをやりたいのです。

本当に、全くただ疲れるだけの作業なのに、このおかしな、滑稽な心模様。

もう一つ、雪の話がありました。

この冬が大雪かどうかというのは、どこでも話題になることなのですが、カマキリの卵の位置が低いと少雪とか、カメムシの多い年は大雪とかいうのは、最近あまり当てにならなくなったそうです。動植物までもが、気候の予想が難しくなったというのです。

どうなのでしょう。

何か、深刻な話になりました。

教育のパラダイム転換を考えよう

淑徳大学大学院教授 岡田 ^{まさのり} 匡令

教育を取り巻く環境が大きく変化してきています。教育現場でも、これまでの教え方ではどうもうまくいかない何か大きな変化が起こっているとお感じになっていることでしょう。身近なところでどうすればよいのかについて、みなさんといっしょに考えたいと思います。

教育を取り巻く外部環境には、経済、文化、法律、行政、社会情勢、国際関係、地球環境などがあります。教育制度や教育現場にこれらの変化が日々衝撃を与えます。衝撃の大きさによって変化のスピードや変化のあり方が変わるのです。変化がゆっくりと進むときは、徐々に環境適応する進化の過程をとるでしょうし、急激に変化するときには、これまでとは関係なくまったく新しい状態にするという革命の過程を通ることになります。

教育は人類の歴史と同じ時間をもっています。つまり、人間が生きていくうえで必要な知識や知恵を獲得し、社会を形成し維持していく術を創り出し伝承することで人類が今まで生き延びてきたことがその証拠です。当初、教育は日常生活の中で家族や共同生活者（コミュニティ）から自然に行われてきたのですが、文化が高度に発達するにつれ民俗や国家や宗教のアイデンティティが鮮明に意識され、自らの規範を作ることによって意図的で制度的な教育が行われるようになったことはご承知のとおりです。一つの社会がある種の境界をもって価値を形成することで、他の社会と競争・協調・同調・摩擦という関係が必然的に創り出されるのです。人々の関係を調整し、より好ましい生存関係を創り出す知恵を継承し発達させることが教育に課せられてきたの

です。ですから、今日的な課題を解決して望ましい未来社会を形成するために次世代を育成していくことが私たち教育現場にいる人々の責務なのです。

科学技術の発達は、人間主導の時代から物質文明との共生時代へとパラダイムを変えてきています。つまり、科学技術を人間がしっかりと制御する力を備えなければならないということです。身近なものとして携帯電話を例にとりますと、それはいつでもどこでも情報の受け渡しができる便利な道具です。変化は新たな変化を創り出していきますから、これに乗り遅れると疎外されてしまいます。携帯電話がつながらなければ次のところにつながっていき、新しい情報のネットワークが形成されます。このネットワークは、泡沫のごとく生まれては消えていく淡いものですが、人々にとってネットワークからはずされることに強い不安感をもつことになるのです。コミュニケーションツールに占める携帯電話の割合がきわめて高い状態が続くことで依存症が生じ、ひいては関係切断の不安症に陥ります。友達であることが携帯電話の接続という結合関係と密接に連動していますから、外形的で表層的な関係にとらわれることになるのです。人々の関係は心のつながり、つまり信頼と思いやりによって作り上げられていることに気づかないからなのです。このことを教育現場でしっかりと教えていかなければなりません。

携帯電話で膨大な情報収集が簡単にできることから探査することで、新しいものを探し当てるといった調能力が低下してきています。ある程度の知識を携帯電話で知ることはでき

ますが、深く思索する能力を身につけさせることになりません。英単語を調べるのでも携帯電話や電子辞書のみで済まそうとしますが、語源や関連表現などを調べるができないのですから、発見の喜びや未知との遭遇といった脳の刺激（開発）につながっていかないので教育になりません。

デジタルゲームで一人遊びをする時間が増大すると、人々と係わる時間が縮小し、社会的関係を形成する力が幼児の状態のままで年齢に応じた係わる力が発達していないのです。ですから、子どもたちに小動物の飼育を通して命の大切さを教えられると信じている風潮がありますが、この方法では「命とは何か」を教えることができて、「命の大切さ」を教えることになっていません。「命の大切さ」とは、与えられた命を全うすることであり、そうなるように共に支援することなのです。そのような意識を常にもち続ける心、無意識のうちにそのような心になるように身につけさせることができて、はじめて命の教育ができるのだと思います。

自分がされたくないことは他の人にもしないことが基本です。これとても人間のエゴによるものですから、人間がもつ性質を理解し、それを制御（自己抑制）することを解らさなければなりません。豊かな経済社会は物欲を高い水準で満たしますから、この制御能力が退化していきます。したがって、我慢や忍耐は、目標をもってそれを実現するためにハードな自己抑制をすることを通して体得させる必要があるのです。

人間が招いた地球環境の変化は、いまや喫急の課題となっています。私たちの生き方そのものを変えていかなければならない重大な内容もっています。環境汚染やゼロ・エミッションといった身近な課題もありますし、地球環境を望ましい水準の範囲に止めなければならぬとする長期的でマクロ的な課題もあります。変化は思いのほか速いスピードで進んでいますから、私たちはこれまでの価値

観を変え、グローバルな視点に立ってすばやく行動するような、そんな人間を育てなければなりません。対処療法的な個別対応だけでなく、私たちが築いてきた社会システムや社会生活のスタイルを根底から変えることができる人間に育てることです。

国際理解教育もその内容が大きく変化しています。外国や地域、民族を理解することだけではなく、国際共生を多面的に考えられる人間を育てることです。私たちが世界のあらゆる場所やあらゆる人々の働きと深く係わっていることを知ることで相互関係を理解し、世界の人々に対してどう係わっていけばよいかを学ぶことでなければなりません。地図や国旗も大切ですが、地球は一つにつながっていることをそこから読み取らせるのです。自己の立場を主張することは必要であります。が、他者の痛みを理解しない主張は共生の理念とは程遠く、不快な感情を創り出します。これまで、欧米重視の意識が何の根拠もなく強調されてきました。欧米を先進文化ととらえてそれ以外の国や地域についてあまり知らうとしてきませんでしたし、教えることに積極的ではありませんでした。それだけ情報が不十分であり、ときには間違った情報が実しやかに喧伝されています。これでは何も知らない子どもたちは最初から間違った意識をもってしまいます。今日では、インターネットやTV映像といったメディアの発達で現実を見ることができるようになりましたが、製作者の意図が働き、全体の中の一部が都合よく切り取られることがありますから、教材として注意深く取り扱う必要があります。

国際理解教育をする場合に大切なのは、私たち自身が日本と日本人について理解を深めることです。外国の人たちに正しく日本人を理解してもらうには、私たち自身がよく理解する必要があります。私たちの中にさまざまな形で脈々と受け継がれる日本人の価値観や行動様式を学ばせなければならないのです。

「発展」を新設した理由と活用の方法

淑徳大学名誉教授 新宮 弘識

質問：「発展」を新設した理由を説明してください。

*展開のあとに「発展」という活動を新設したのは、貴社の今回の改訂の一つの特長であると思います。これは、他社にはない考え方ですが、新設した理由をお聞かせください。

- 〔解説〕①道徳教育は、道徳の授業だけで成果をあげることがむずかしいと思います。人づくりという大事業のためには、すべての教育を結集する必要があります。これは、学校における他の教育活動とは異なる、道徳教育の特質だと思います。
- ②「徳は得なり」（論語為政第二の朱註）といいます。体得・会得・納得・自得の得です。したがって道徳教育は、道徳の時間によって、人間はいかに生きたらよいかを追求して明らかにするだけでなく、それを自得することが重要になります。
- ③ところが、道徳の時間だけでは、自得するまでの教育が十分にできません。礼儀に関する教育を例にとって考えてみますと、道徳の時間では、1学年に2時間ぐらしか礼儀の指導に当てる時間がありません。これでは、礼儀の意味を考えさせ明らかにすることが精いっぱい、それを身につけるところまでの教育はできないと思います。国語における敬語の指導や特

活や総合的な学習の時間における礼儀の指導、家庭や地域における礼儀の教育等によって、考えては行い、行っては考えることを繰り返すことによって始めて、子どもは礼儀正しさを自得していくといえるのではないのでしょうか。

- ④ここに、道徳の時間によって追求され明らかになった人間の生き方を、学校における他の教育活動や家庭や地域における道徳教育で実際に行うという意味だけではなく、繰り返し繰り返し行うことによって学習された内容が、より拡大し（広がり）、より充実し（深まり）て、子どもが人間の生き方を自得していくという道徳教育の構想が重要になります。
- ⑤学習指導要領の総論に「学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間をはじめとして各教科、特別活動や総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない」「道徳教育を進めるに当たっては、家庭や地域社会との連携を図りながら……」としているのは、前述した精神に立っていると考えられます。
- ⑥このような基本的な精神を積極的に受け止め、道徳の時間と他の道徳教育との「橋渡し」として、「発展」を新設したわけです。

質問：「発展」は、「期待」や「関連・連携」と、どのように違いますか。

＊貴社が「発展」を新設した理由は理解できました。ところで、前回、貴社が設定していた「期待」や、現在一般的に表記されている「関連・連携」とは、どのように違うのでしょうか。

〔解説〕①意図するものは同じだと考えています。しかし、「関連・連携」の現状を考えてみますと、「この道徳の授業は、国語のこの活動と関係している」「この道徳の授業は、家庭教育のこのことと関係している」というように相互の関係を実線(——)で結んだだけのものがほとんどではないでしょうか。昭和30年代の後半にも同じようなことが行われましたが、紙上だけの研究にとどまって、道徳教育の推進には役に立たなかったという歴史的教訓を生かさなければならないと思います。本社の指導案にも「関連・連携」の項を設けていますが、やはり同じことがいえるといえます。これでは、相互が内容的にどのように関係しているかという連続性や発展性がよくわかりません。しかも、その表記は、子どもとの目に触れることが少ない教師用の指導書に表記されているだけです。これでは、教師の指示待ちという学習になってしまうと思います。

②このような傾向を何とかしたいと考えて、本社では前回の改訂では指導書に「期待」の項目を示したのですが、その効果は思ったほどのことはなかったように思います。そこで今回の改訂では、前記の意図をもっと強化したいと考えて、「発展」の項を新設したわけです。

質問：意図はよくわかりましたが、低学年の児童書に「発展」が表記されていないのは、なぜですか。

〔解説〕○低学年こそ、あらゆる教育を結集した横断的な道徳教育を構想する必要があると思いますが、低学年では、このような連続的・発展的な活動は、教師の手助けがないと無理ではないかと考えて、指導書のみに記載したわけです。決して軽視したわけではなく、むしろ強化すべきであると思います。

質問：「事前・事後」という活動がありますが、この「事後」と「発展」とは、どのように違うのでしょうか。

〔解説〕○「事前・事後」という表現は、何かが起こる前・何かが起こったあとという意味であり、事(何かが起こる・起こった)を核にしています。道徳教育において「事前・事後」という場合の「事」は、道徳の授業に当たります。これでは、道徳の授業が「主」であり、事前事後は「副」であるということになります。「発展」は、道徳教育の副ではなく、主のひとつであると考え、「事後」と区別して「発展」としたわけです。

質問：「発展」を新設することによって、道徳の授業も変わるとはいますが、どのように変わるとは思いますか。

〔解説〕①展開構想が変わってくると思われます。従来は、1時間の道徳の時間をどのように構想するかという観点からの授業構想が主ではなかったでしょうか。「発展」を意識すると、道徳の時間だけでなく、他の教育活動における道徳教育や家庭や地域における道徳教育まで視

野に入れた大局的な観点に立った授業構想ができるようになるのではないのでしょうか。囲碁の場合は、局部観と大局観とが要求されますが、教育にも局部観と大局観との両面が要求されると思います。

②特に、終末が変わってくると思います。「この道徳の授業によって何を学習したか」というまとめだけではなく、「それをいかなる活動につなげていくか」という学習の連続性・発展性を考えた終末にならざるを得ないのではないのでしょうか。

③ということは、「発展」によって道徳の時間が、よりいっそう充実していくといえないのでしょうか。
〔この件に関する具体例は、10～21ページをご覧ください〕

質問：「発展」の重要性はよくわかりました。しかし、それを児童書に示しただけでは、子どもが主体的に「発展」に取り組むようになるとは考えられません。教師側からのほたらきかけが大切になるとは思いますが、その方法の要点を示してください。

〔解説〕①道徳教育は、ひとり一人の子どもが、親や教師の手助けを受けなくても人間らしい生活ができるようになることを期待しています。つまり、道徳的な「ひとり立ち」の教育であると思います。

②したがって、子どもが「発展」を見て自分から動き出すことが望ましいと思います。ところが、そのような主体的な学習はむずかしいわけです。そこで、教師の教育力が大切になってくると思います。

③子どもが、「発展」を見て、「よし、実際にやってみよう」という

意欲が湧くような、魅力的な道徳の授業を行ったかどうか、まず、問われると思います。それは、学習のおもしろさではなく、学習した内容に強い興味関心をいただくことができたかという問題でもあります。

④次に重要なことは、「発展」の内容が、子どもの主体的な活動をそそる内容であるかということです。次ページに本社の編集委員が考えた「発展」の具体的な事例とその類型を示しましたが、これは、仮設的な案です。今後、これを読んだ子どもたちが、ほんとうに主体的な活動を始めるか否かの検証が必要であり、その結果によっては、修正を加えていかなければならないと考えています。現場の先生がたは、この仮設を参考にして、自分の学級に最適な「発展」を考え、子どもたちに示していただければありがたいと思います。

⑤また、「発展をみとどける」ことも大切ではないかと思います。「発展」の結果を発表する時と場を確保したり、道徳の授業で取り上げて検討したりすることも大切ではないのでしょうか。

⑥「先生は、わたしたちの生活をいつも見てくださるのだ」という大人の目を意識することは、子どもの主体的な動きを呼び起こす基であると思うからです。

質問：「発展」といえば、『心のノート』の活用が考えられますが、それ以外の活用のパターンを示してください。

〔解説〕○本社の児童書や教師用指導書に示している「発展」の主なものを拾い出し、分類したものが次表です。

「発展」の類型と具体例

「発展」の類型と具体的な例（１から６までは重複している）	１年	２年	３年	４年	５年	６年
１．実行の時と場を示唆したり実行の計画を立てさせる ①友だちと仲よく遊ぼう。 ②お世話になっている人に、お礼の手紙を書いてわたそう。 ③生活のめあてを立てて、きちんと実行していこう。 ④家庭で、自分にできる仕事をしっかりやろう。 ⑤まちの祭りや催しに参加しよう。 ⑥自然を守るために自分にできることを決めて、実行しよう。	8	10	14	9	6	10
２．調べる活動・読む活動や学習課題を示してやる ①帰りの会のとき、机やロッカーを整理しているか調べよう。 ②自分が生まれたときのことを調べよう。 ③守られていないきまりをさがそう。 ④校歌にこめられている人々の願いを調べよう。 ⑤郷土の誇りをたくさん見つけよう。 ⑥自分があこがれている職業についている人に、話を聞こう。	5	6	13	14	17	17
３．『心のノート』の活用を示してやる ①『心のノート』に、みんなで使う物のよい使い方を書こう。 ②ふるさとのよさをまとめて、『心のノート』に整理しよう。 ③感動した話を『心のノート』に書こう。 ④『心のノート』の「思いやりカード」に記入しよう。 ⑤『心のノート』を読んで、「家族新聞」をつくろう。	15	9	7	6	15	4
４．家族との話し合いを示唆してやる ①おじいさんやおばあさんのすごいところを話し合おう。 ②家の宝は何かについて話し合おう。 ③家の中での礼儀について話し合おう。 ④自然を守る暮らし方について、家族で話し合おう。	2	4	2	3	6	0
５．他の教育活動でどう生かすかを示唆してやる ①生活科で、お年寄りに喜んでもらうことをしよう。 ②特別活動で、夏休みの計画を立てよう。 ③朝の会や帰りの会で友だちの話を最後まで聞くようにしよう。	4	6	2	5	2	5
６．実行したり調べたりした結果を発表する時と場を設定してやる ＊朝の会や帰りの会・背面黒板・学級文集・学級新聞・学級通信・児童委員会・特別な発表会の開催等、多様な発表の場がある。	14	14	6	15	13	5

- 「発展」は、内容や学年の違いによって異なるであろうが、前記①～⑥の活動が、バランスよく設定されることが望ましいともいえない。しかし、いくつかの問題点がある。
- 他の教育活動との関連が意外に少ない。これは、他の教育活動にはその活動独自のねらいがあるために、関連がむずかしいといえるであろう。教師の大局的教育観を期待したい。
- 「家族との話し合い」が意外に少ない。家庭との連携は重要課題であるが、むずかしい問題をかかえていると思われる。
- 実行の時と場や調査活動の示唆は、学年の発達に即応しているように思われる。

「発展」—豊かな学びの広がりを期待して

★インタビュー★

千葉大学大学院教授 上杉 賢士

上杉 最近、ご存知のように「生きる力の育成」が教育の全体を通じて、目標として注目されるようになりました。これは当然のことながら道徳教育においても、その方向をめざしていくということであると考えます。そのために、従来は、45分の授業で何らかの形で子どもたちの変容を期待するという考え方のもとに授業が行われてきましたが、やはり「生きてはたらく力」をしっかりと、確実に子どもたちに身につけさせるためには、その前の指導があり、授業があり、そしてその後何らかの形で学びが継続するという一連の流れの中でそれが実現できるかと思っています。とりわけ、授業が終わったあとに、それで子どもた

ちの学びが終結してしまうのではなくて、その後どう発展していくかということ——これがきわめて重要な問題になってくるだろうと思います。

そのためには、当然のことながら、授業の構想のしかた、あるいは限定的に言えば、「終末」をどうするかということ、そこが一つの問題になるかなと思います。光文書院版では、そのところを「発展」というネーミングで、授業のあとの豊かな広がりを期待しようという、しかけをしたということであります。3人の先生方から、それぞれ、「発展」をどのように実践されているのかということをおうかがいしたいと思います。

④「人が喜べば自分もうれしい」という心をもった人の話を思い出して話し合う。

⑤「もっとたくさんの人を探そう」という課題について話し合う。

●国語の教科書や読み物等のほかに、身近な人も話題にしたい。

●隣りにいる友達の例も話題にしたい。

●どのように調べるか、その結果をどのように記録するか、それをどのように発表するかについても明確にする。

○「人が喜べば自分もうれしいという心をもった人」は、わたしたちのまわりにたくさんいるね。

○ようし、もっとたくさん調べよう。
○お父さんやお母さんにもきいてみよう。
○お話を読んで調べてみよう。

発展

☆国語の教科書や読み物、身近な人の中に、「人が喜べば自分もうれしい」という心をもった人はいないかを調べさせ、それを背面黒板に発表させる。

▲1年「はしの うえの おおかみ」の「発展」（指導書・研究編より〈90%に縮小〉）

「発展」は体験的に学ぶことの可能性を広げる

富山市立広田小学校教諭 福田 有児

上杉 それでは、福田先生、お願いいたします。初めに、低学年としての発展の具体例についてご紹介ください。

福田 低学年の担任のときに、生活科との関連で、近くにある「老人保健施設」に通っていく中で、さまざまな道徳的価値が高まるだろうと考え、間に子どもの心理的な状況を見ながら道徳の授業をはさむ形で、2年間ぐらい実践した一例を紹介します。

子どもたちは、自分がうれしいと思えることをお年寄りにどんどんはたらきかけるんですね。例えば、プレゼントを出すとか、出し物をするとかですね。それでお年寄りが喜んでる姿を見て安定していたときに、もうちょっと深い喜びについて考えさせたいと思ったもので、『はしの うえの おおかみ』という教材を投入しました。それは、「相手が喜ぶことはうれしいこと」ということを考えていくよい材料になると思い、道徳の授業として実践しました。授業の後半ぐらいに、子どもたちは訪問してきたことを思い出して、ある子どもがこう言いました。「みんなはプレゼントとか出し物をしているけれど、ほんとうにお年寄りたちは喜んでるのかな。わたしは、もっとお年寄りのことを見てあげなければだめだと思う。」そして、こういうことがあったと思い出し、言いました。「おじいさんはわたしの手を、あめをなめるように何回でもなめてくれた。どうしてかなと考えていたんだけど、きつとうれしかったのだと思って、わたしもうれしい気持ちになって、おじいさんのことが好きになった。」このことに子どもたちは、大きな驚きを示しまして、「自分たちがほんとうにお年寄りのことを考えていたのか？」という心の動きを感じ

じ、さらに意欲的に訪問を続けていったのです。このあたりが発展になると思うのですが、子どもたちはいろいろと今までやってきたことを見直して、「ほんとうにお年寄りのためになることは何なのか。」ということを考えはじめました。具体的には、今まではこちらから一方向にはたらきかけようとしていたのだけれど、いっしょに編み物することとか、いっしょに体操みたいなことをして楽しむことのほうが、お年寄りも自分もうれしいような気持ちになってきたと……。まさに、相手の状況を見て、そこからまた自分の喜びに返していくような動きが出てきたのです。これは、発展というものの効果の一つではないかと思います。この実践の場合は、試すことがあるという場を授業の中で計画していくことと、道徳の授業の終わりに、今までの経験をつなげて考えられたことが、よい発展のあり方につながったのかなと思いました。

上杉 重要な示唆をいただいたという気がするのですが、1時間の授業を組んで、その発展を豊かにするためには、やはりその前の活動が豊かに展開していて、授業が一つのきっかけとして、それがうまく機能していると、その後の発展がひじょうに大きく見込まれる。そういう例かなと思いました。言い換えると、授業以前に子どもたちはいろいろな体験をしているわけですね。体験が授業によって整理されて、焦点が定まる。今の例でいえば、ほんとうにお年寄りのためになっているのかという疑問をもった。そのことが、その先の活動の中で子どもたちの問いとして広がっていったという、そういう理解をしていいでしょうね。その先の子どものようにすについて、もう少し具体的にお願いします。

福田 子どもたちは、活動をやめるということができなかったようです。人と人が出会うということはかけがえのないことで、授業が終わったからお別れをするというのは、子どものことや訪問先の方々のことを考えると、できないと思い、一応授業は学年末を迎えて、物理的に終わるのですが、その後の子どもたちの行動を追っていましたが、子どもたちはそのあとも訪問を続けていくのです。それから7年近くたっているのですが、現在、中学3年になっている子どもたちが、車いすをふと洗いにすることがあるということを知り、考えさせられました。子どもたちの中で、この出会いというものを通して、学習の終わりは先生がピリオドを打つのではなくて、発展という形で子どもの中で一生続いていくものだと思えたのです。先ほど、手をあめのようにになめられたという子どもは、実は中学校に入ってから不登校になったそうですが、お年寄りのところに通いながら治療されていて登校したという話を聞いたんです。これも、

最初は自分がだれかを励ましていたのだけれども、今度はお年寄りから自分は支えられて、励まされているということ……。こういう事実をまのあたりにしますと、発展の重さというものをすごく考えさせられましたね。

上杉 たいへんスケールの大きな発展例が示されたと思います。今の先生のお話の中で、特にポイントになるのは、例えばお年寄りとの交流の中でするのが、学校の都合・子どもたちの都合で、授業が終わったから途絶えるわけにはいかないですね。そういう意味で、事前と授業とその後の発展ということを考えたときに、課題の連続性みたいなものが、発展のために重要な条件かなということも感じました。

福田先生、低学年というと、副読本の中では発展の方向を具体的に示していないんですね。子どもたちに発展の方向を考えさせるというよりも、教師の側から発展の方向を示唆してやるという意図のもとに、本文には入れないという措置をとったわけですか。やはり、

◆主題名/ひとが よろこぶことは うれしい こと ◎ 児童書 P.74～76

28 はしの うえの おおかみ 2～(2) 思いやり・親切

1 主題のねらい

- まわりの人々に思いやりの心をもって接し、親切にしようとする。
- 他者が喜ぶことに喜びを感じて他者を支えている人の心がわり、その心に感動することができ。
- 自分がうれしいと思うことを他者にもしようとする心が、ほんとうの思いやりであることがわかる。
- そのような心は、自分ももっていることがわかる。
- 思いやりの心をもって人に親切にしていこうという心をもって、日々実践していく。

2 主題設定の理由

①ねらいについて

思いやりとは、心遣りであり、自分の心を相手に遣うという意味をもっている。相手と同じような立場に立ったときの自分の気持ちを思い起こし、あのときの自分はこのような気持ちであったから、今の相手も同じような気持ちであろうと推し量ることである。

ところで、思いやりと優しさを混同することがある。優しさは、それを生んだ心によって道徳的な価値が大きく異なる。自己顕示欲によって生まれた優しさと思ひやりによって生まれた優しさは大きな違いがある。このような思いやりが高じると、親しみが切になる。親切な行為によって表れるのである。

②児童の実態

低学年の児童は、親切はよいことであり、親切にすれば友達がたくさんでき、みんなに好かれるように思っている。だから、「わたしは優しいでしょう。だから仲よくしてね。」と親切にする。相手の気持ちがどうであるかはおまじなしに、親切を押し売りするのである。真の思いやりから生まれた親切ではないから、やがてその親切は通用しなくなる。友達に好かれる人間になりたいとする心は大切な心である。その心に発して相手のことを心から思いやり、親切にすることこそ友達に好かれる秘訣であることに気づかせたい。

③資料について

「もどれ もどれ。えへん、へん。」といったおおかみが、うさぎを後ろへそっと移してあげたのは、表面的な優しさであるが、その表面的な優しさを促した内面的なものとしての心こそ重要である。それは、自分の力を誇示し、弱者を卑下しようとする心から、他者を支える喜びを自分の喜びとする心への変容なのである。まさに思いやりの心の覚醒である。

3 関連・連携のための指導計画例

①道徳の授業……資料『はしの うえの おおかみ』を読んで、話し合う。[本時]

②日常生活……国語の教科書や今までに読んだ本の中から、「人が喜べば自分もうれしくなった人」の語を採って発表する。

③朝の会など……そのような心は自分ももっていることについて、校長先生や保健の先生から話を聞いて実践し、「ここらのノート」(あたたい ころで)に記入していく。

4 出典

◎奈須三郎作『橋の上のおおかみ』／『やさしい心』(ポプラ社)

3 展開例

主な学習活動	指導の方法	子どもの心の動き
●「はしの うえの おおかみ」に、好きな動物が出てくるか」という問題をもちて資料を読む。 〔224ページの「絵話の原文」参照〕	●「好き」という感情は、相手の人物を好意的にとらえた状態であり、特に低学年の場合は、この感情から出発したい。	○「はしの うえの おおかみ」はどんな話かな。 ○どんな動物が出てくるかな。 ○好きな動物が出てくるかな。
●好きな動物がいたか、それはどんな動物かについて話し合う。 ●「くま」が好き。 ●「おおかみ」も好きになった。	●好きになったわけを中心に話し合わせたい。 ●優しい、いばらない、いじわるをしない、親切等の反応を受けて、「人が喜べば自分もうれしい」という心を後きはじめたおおかみを振り返りにしていく。	○くまが好きー優しいからーいばらないからーいじわるをしないから。 ○おおかみも好きになったー優しくなったからーいばらなくなったから。
●「くま」や「おおかみ」が好きなわけについて話し合う。	●「ひとが よろこべ じぶんも うれしい」というキーワードを、話し合っていくように指導する。	○くまにもおおかみにも、「人が喜ぶのがうれしい」という心があるから好かれるのだなあ。
●「人が喜べば自分もうれしい」という心をもった人の話を思い出して話し合う。	●国語の教科書や読み物等のほか、身近な人話にしたい。 ●関わりある友達の例も話題にしたい。	○「人が喜べば自分もうれしい」という心をもった人は、わたしたちのまわりになくさいるね。
●「もつとくたくさんの人を愛そう」という課題について話し合う。	●どのように調べるか、その結果をどのように記録するか、それをどのように発表するかについても明確にする。	○ようし、もつとくたくさん調べよう。 ○お父さんやお母さんにもきいてみよう。 ○お話を読んで調べよう。

※国語の教科書や読み物、身近な人の中に、「人が喜べば自分もうれしい」という心をもった人はいないかを調べさせ、それを再度明確に発表させる。

低学年ですと、この先の発展の方向について教師が積極的に示唆をしてやるという必要性を感じますか。先生の今の実践例ですと、だまっけていても次の動きに広がっていくというのを感じましたが……。

福田 よりその人らしさというものを出すのであれば、子どもに任せてもいいと思うのですが、むずかしい場合も多いと思うんです。やはり、ある程度、教師側から示唆をするということも大切だと思います。しかし、何よりも大切なことは、発展の中で学んだことをクラスの中で紹介し、ともに味わったり、ときには厳しく吟味し合ったりすることだと思います。

上杉 低学年の特徴として、例えば、先生は『はしの うえの おおかみ』という資料をお使いになりました。これはこれで、子どもたちは結構楽しめる教材だと思うのですが、ややもすると、その世界で子どもたちが遊んでしまって、自分のクラスに結びつけたり、次の活動へつなげていったりとかができにくい状況があるかなと思うのですが、その点については、先生はどのように思いますか。

福田 主題を組むときに、先ほどお話したように、長い中で子どもに体験を通して感じたことをふくらませた状況で道徳の授業を行うと、より低学年のほうが固定観念がないというか、するどい感性をもっているんで、ややもすると暮らしとむりやりに結びつけようとする高学年よりも、自然に出てきやすいのではないかと感じました。やはり、長期的な計画を初めに立てるということが、資料の中だけでは終わらない秘訣の一つではないかと思っています。

上杉 やはり教師の側に長期的な展望があつて、その中で道徳の授業の役割をどう定めていくかというところの考え方がしっかりしていれば、むしろ低学年では、彼らの中に、授業と授業ではない時間の区切りがないだけに、むしろスムーズにつながるといったことなのかもしれませんね。

福田 この授業、2年生で行ったのですが、なぜ2年生でしようかと思ったかというと、高学年のこのような授業を見たときに、子どもが自分を責めていく場面に出会ったからなんです。お年寄りを避けている自分だということを、涙を流して話している姿を見て、ものごとをありのままに受け止める低学年の子どもならば、もっと自然な形で出会えるのではないかなと思ったのです。実際に実践してみると、楽しんでお年寄りと接していく姿がとても印象的でした。このことから、子どもの発達段階に応じた主題もあるだろうし、発展のしかたもあるのではないかと思います。これからは、発達段階に応じてどのような授業を考え、どのような発展・終わり方をしていけばよいのかということを今、考えております。

上杉 発達段階に応じたという関係から、とりわけ低学年では、より豊かな発展をもたらすためにはどのようなことがポイントだと思いますか。

福田 高学年も同じだと思うのですが、実際にふれること、「ものにふれる」ことだと思います。相手や実際のものにふれ、感じる心を耕し、それを幾重にも積もらせていくということが、高学年になったときに多くの判断材料をもつことにつながっていくと思えるのです。そういう意味で、できるだけ学校を飛び出すような、また教室にもものを持ち込めるような、そういった活動の中での道徳の授業というものが低学年には発展させやすいのではないかと思います。

上杉 「ものにふれる」ということは、体験的に学ぶという言葉に置き換えてもいい気がしますね。低学年の子どもたちの特徴として、生活科に象徴されるように、頭より体で先に感じるといえますね。体でいろいろなことを感じ、しっかりした基盤を形成する。その上に、中学年や高学年での学びが重なると理想的な展開といえますね。ありがとうございます。

さまざまな「発展」のバリエーションと可能性

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

上杉 それでは、加藤先生、お願いいたします。授業が終わったあと、具体的に子どもたちの活動が発展し、広がっていったという例をまず最初にお話いただけますか。

加藤 わたしは3年生を担当しているのですが、本学級の児童の実態から考えて、「思いやり・親切」というテーマを、通年の重点にしていこうと思い、指導に当たっています。光文書院版に『わたしのしたこと』（主題名／しんせつとおせっかい）という資料があるのですが、まず一次としてその授業を行いました。さらに、その授業のあと、二次として学級の実態に合う自作資料で授業をしました。まず第一に『わたしのしたこと』の授業、そしてその授業を受け、発展させる形で次の授業というように、授業相互の発展が考えられます。すなわち、内容項目の価値を構造的に分解し、一次でどこまでをねらい、それを受けて二次でどこまでをねらうかというような段階を設定するということです。次に、授業と授業をつなぐ間にどのような発展が考えられるか、子どもたちの学校生活、家庭生活、地域生活の中で、「思いやり・親切」にかかわる実践なり、言動なりがあるか、それを取り上げていくことも大事だと思います。例えば、「思いやり・親切」の授業を3回行うとしても、同じ内容項目・同じねらいということではありません。最初は『わたしのしたこと』という資料で「親切とおせっかい」について考える。その次は、「ほんとうの思いやりとは何だろう？」ということを考える。次に、自分自身の思いやりにはどういうものがあるか、具体的に自分自身の問いとして考えていくとか、そこから具体的な生活体験へつなげていくというような流れを仕組んでいく。

『わたしのしたこと』では、発展として「学校や地域の生活の中で親切な行為に目を向けることができるように、学級新聞や掲示板に紹介コーナーを設定する。」とあります。わたしは、「学級通信」に子どもたちの言動から見取ったものを書いたりとか、子どもが日記に書いてきたものを取り上げてそれを紹介したりするという形で、子ども自身に広げ、深めていきます。そのような一連の学習の中で、「ほんとうの思いやりとは何だろう？」ということ考えた授業後に、子どもが「わからなくなっちゃった。」と言いにきたのです。

「何が？」ときくと、「これって、親切なのか、おせっかいなのか、いいことなのかどうかわからなくなっちゃった。」と言うのですね。その場でその子と個人的に話し合いをしました。そのような反応は、子どもから当然出てくるであろうと期待される反応として予測はできていました。その意味で「想定される発展」の形です。そこから、「じゃあ、もうちょっと考えていこうよ。」というつなぎをしました。

上杉 今のお話ですと、一つは、次の授業につなげるという発展のしかたがありますね。これは、大きな単元構想の中で考えられる。もう一つは、必ずしも授業という形態はとらないけれども、授業が終わったあとに子どもたちが「しんせつとおせっかい」というのが一つのキーワードとして機能していて、自分たちの暮らしの中で、実践の中で、そのキーワードがいつも子どもの心に宿っていて、それが問題意識として、それに支えられながら生活していくという発展のしかた——大きくは二つが出されたかと思います。例えば、そういう形で授業がそこで完結してしまわない

で、次に何らかの形で子どもたちの思考や実践が継続するような授業の終わり方のポイントを……。

加藤 ポイントの一つとして、キーワードとして残す、ということがあげられると思います。自分に必要感がなければ、次に続いていかない、残っていかないと思います。子どもの心に残るためには、自分の心にすっと落とし込める言葉で残すことが重要です。それがキーワードです。子どもの中の問題意識が、与えられたものから自分自身で「それってどうなんだろう？」というように、自分から見いだすものにつながってはじめて、発展が発展として生きてくる——そんな気がします。初めは、それを指導者が意図的にキーワードとして落とし込んでやる。そして、それが理想的に発展していけば、こちらがだまっても自分自身で問題意識をもって考えていくようになる。そういうような形もとれるだろう。ですから、本時で何をねらい、心に響き、必要感を生じさせられるかという手立ての一

つとして、キーワードとして子どもの言葉でおさえるということをわたしはしています。

上杉 これはきわめて重要なポイントだと思いますね。だれしも、その授業が授業で終わらないで、何らかの形で学んだことがその後の子どもの生活に影響を及ぼしてほしいと願うんですけども、往々にして授業は授業、生活は生活というようになってしまう。そこがうまくつなげていくというよりも、むしろ必然的に子どもたちが授業のあとに、学習のめあてや意欲をもって活動するには、授業の中でとりあえず主題であるとか、資料であるとか、教師が用意して授業に臨むのですが、それが授業の中で子どもたちにとっても必要感というようなものに置き変わっていく——そういう授業を組み立てていくと、そのあとにだまっていても広がっていく。具体的に広がっていったもの、例えば子どもたちの作文などを紹介していただければイメージがわかります。

加藤 子どもは、そのような必要感をもって

◆主題名/しんせつとおせっかい

◎ 児童書 P.22～24

6 わたしのしたこと

2～(2) 思いやり・親切

1 主題のねらい

- ◎親切とおせっかいの違いに気づき、相手の立場に立って親切にしようとする。
- ※思いやりの心ともなる親切な行為は、人間の社会では大切なことを知る。
- ※親切とは相手の気持ちを理解しての行為であり、おせっかいは相手の気持ちを考えずに自分の思いこみで行っていることであることがわかる。
- ※同情や共感をもとにした思いやりの行為が相手への親切であることを理解する。

2 主題設定の理由

①ねらいについて

親切とは、他者の喜び・悲しみ・痛みなどがわかり、気持ちを理解しようという適切な行動をとることである。

このような心は人間としての基本的なものであり、心の温かさ・優しさである。反対に、おせっかいは他者の思いを押し量ることなく、自分だけの思いこみの行動である。

同情や共感をもとにした思いやりの行為こそ、他者への親切といえる。

②児童の実態

中学年になったばかりの児童の生活場面では、思いやりや親切は案外にむずかしいものである。しかし、3年生であっても「人に親切にしたい」という心は十分に持っている。その心を大切に育てていきたいが、そのためには親切とおせっかいの違いをわきまさせておく必要がある。

相手は何を求めているかを考えて行動することができる。お互いの心の交流や共感に支えられた人間関係を育て、心の行き違いが生じないようにしたい。

そのためにも、自分の行為を第三者の立場でとらえたり、別の視点で見つめたりする時間や場が必要である。

③資料について

「わたし」は友達の名ちゃんの苦しい色ぬりを手伝い、親切にしたつもりだった。しかし、名ちゃんの悲しそうな顔を見て、自分の行為が相手の気持ちを理解していなかったことに気づいていく。

親切にしたつもりだったが、おせっかいだったかもしれないと気づいていく「わたし」の心の内を視点で見ていくことで、親切とおせっかいの違いを明確にすることができる。

日常生活で……第三者の立場でとらえたり、別の視点で見つめたりする資料としたい。

3 関連・連携のための指導計画例

- ①「心のノート」……「相手の気持ちを考えて親切に」を読み、自分の内にある思いやりの心をさがして書き込む。
- ②道徳の授業……資料「わたしのしたこと」を読んで、親切について話し合う。[本時]
- ③日常生活……学級新聞や掲示コーナー等で、学校や地域で見つけた「実行した」親切な行為を紹介し合う。

4 出典

◎編集委員会作

3 展開例

主な学習活動	指導の方法	子どもの心の動き
◎「心のノート」に書き込み 自分の思いやりの心を表現する。	◎「思いやりの心をさがそう」に記述した「人に親切にしたい」と思う心の大切さを話し合ってから資料を読ませる。	◎みんなも「人に親切にしたい」と思っている。
◎資料「わたしのしたこと」を読み、「わたし」の思いの強さを話し合う。 - お手伝いしたい。 - いいから、いいから。 - 金貨でよかった。 - どうして買ばないの。 - おせっかいだったかな。	◎「わたし」の心の声（ノンちゃん、どうしたんだろう）や（…わたしのしたことや…）などを手がかりにして、親切のつもりが友達を悲しませてしまったことに気づきはじめての心を確認させる。	◎同じようなことをした（された）ことがある。 ◎そのときは、なかなか気がつかなくて、あとでおせっかいだったと気がつくことがある。
◎立場を変えて「ノンちゃん」の気持ちを考えながら資料を読み返す。 - 色ぬりにこまった。 - 自分でやりたかった。 - 金貨でもうれしくない。	◎親切だと勝手に思いこんでいたことが、ほんとうは相手を困らせていたことを二人の気持ちを対比させて考えさせる。	◎相手の立場になってみると、親切なおせっかいがよくわかる。
◎「わたし」と「ノンちゃん」の心の行き違いが生じたわけを考えよう。 - ノンちゃんの気持ちを察していない。 - 自分だったらどうしてほしかったらよかったか。	◎「わたし」と相手の心に行き違いがあったことから、相手は何を求めているのかを考えて行動することの大切さを理解させたい。	◎親切とおせっかいの区別はむずかしいけれど、自分だけの思い込みではなく、こまっていたり悲しんでいたりする人の気持ちを考えてどうすればよいのかを考えていきたい。
◎学んだことをどう実行するか話し合う。	◎「心のノート」で親切はみんなの喜びに親切の体験をまとめていくことを約束する。	◎「心のノート」に「親切にしたこと」「してもらったこと」がたくさん書けるようになる。

☆学校や地域の生活の中での親切な行為を目指すことができるように、学級新聞や掲示板に紹介コーナーを設定する。

80

81

授業を終え、問題意識が継続していたのでしよう、このような作文を書いてきた子どもがいました。「今日、はじめてパンやにおつかいにいった。ちゃんとお母さんに言われたものを買ってきた。そしたら、『1060円です。』と言われた。ぼくは 800円しかもっていなかった。なので、一つパンをもどすことにした。そしたら、となりの人が、さっと 260円はらってくれた。ぼくは、『いいです。』と言ったら、その人が『いいよ。いいよ。』と言った。でも、お母さんに『800円いないで買うんですよ。』と言われたから、おこられちゃうかなと思った。家にかえってその話をしたら、『その人、あまやかしすぎ。』とお母さんが言った。でも、ぼくは心の中ではやさしい人だと思っている。ただ、こんど、そういうことがあったら、ことわってパンをもどしたほうがいいかなと思った。」——どっちがいいのだろうか、やさしさについて注目できるようになってきているんですね。

上杉 子どもの作文をうかがって、授業のときに先生が提示した問題意識が、授業が終わってもなお引き続いているという例ですね。授業の中での教師の問いかけ、それは例えばキーワードという形で象徴されるのですが、それが子どものその後の暮らしの中でも脈々と引き継がれて、教育的な効果を発揮するというので、たいへん興味深くうかがいました。加藤先生は、いろいろな形で発展ということを考えていらっしゃるようですが、過去にやったものでもいいですし、これから予定されているものでも結構ですので、例えばほかにもどのような発展を計画していますか。

加藤 今の「思いやり・親切」の例で申し上げると、授業を保護者に公開していました。あとは、家でも話題が広がるように「学級通信」を出したりとか、共通の話題で話し合いができるような投げかけをしたりしています。その中で、保護者から手紙なりメールなりで反応が寄せられてきます。例えば、「親切についての娘のエピソード」ということで、こ

のようなメールをいただいたことがあります。

「娘が1年生の入学して間もないころ、寝てしまったのか、帰りの電車で降りる駅を乗り越してしまったことがありました。見慣れないプラットホームに降り立ち、不安で泣き出した娘にある女性が声をかけてくださり、『大丈夫よ。』と反対側のプラットホームまで連れていってくれたそうです。半ベソをかきながら駅の階段から降りてきて、一部始終をわたしに話してくれました。親切にしてもらい、とても心強くてうれしかったこと、自分も大きくなったら、やさしい筑波のお姉さんになりたいと娘は言いました。わたしの知らないところで娘を助けてもらい、残念ながらお礼を言うことができなかったのですが、その方に心から感謝しました。その人の親切が、娘とわたしをやさしい幸せな気持ちにしてくれました。困っている人に親切にしてあげたいと思ったようすし、助けたいと以前より強く思うようになりました。やさしくされると自分もやさしい気持ちになり、ほかの人にもやさしくしたいと思うようになり、さらに幸せな気持ちになれる。そんなことを実感したエピソードです。」——そういうところから、やさしさというのは広がっていくのだとか、やさしさについての価値の構造がまた広がっていく。それが家庭教育、家庭の道徳教育に発展していった例ではないかと思っています。

上杉 9 ページに、発展の形態として6つのカテゴリーがあります。その中に、「家族との話し合いを示唆してやる」というのがありますが、今のはここに相当する例かと思います。そのようなメールが保護者からくるというのは、推測するに、きっとお子さんとそのお母さんがかなり密度の濃い話し合いができていたのではないかなと思います。それは、自然発生的に、教師のほうでの問いかけがあつてのリアクションという考え方ですね。そうすると、家族の中で話し合うということの一つの発展の方向として示唆してやることによって、ひじょうに豊かな広がりがある。おそらく、

それが今後、教師のはたらきかけがなくても、きっとその親子の中には、いろいろな道徳的な問題についての会話がしぜんに広がっていくのだろうなということが予想できて、たいへんさわやかな気分にさせていただきました。

ほかにも子どもの作文を用意していただいているようですが、ご紹介いただけますか。

加藤 はい。「今日、〇〇くんがなくなってしまいました。そのりゆうは、友だちからからかわれたからなのです。からかわれていたのは、〇〇くんだけじゃありません。言われている人たちはいやがっているのに、言っている人たちはあまり気にしていないようです。わたしはそれを聞いていると、すごくいやな気持ちになります。それに、友だちがいないところは見たくありません。わたしは、どうすればそういうことが直せるか、こんど学級会で話し合いたいと思いました。」——「思いやり・親切」の観点から、友達というものを見直し、それから自分なりのアクションを起こしたということですね。この反応は、学習体験と日常の体験とが重なり合って偶発的に発生した例として、「想定しない発展」といえると思います。

上杉 この例は、ただ自分の暮らしの中で道徳で学んだことをできるだけ実行していこうという域を越えて、まわりにはたらきかけたり、いわゆるアクションを起こすという、積極的な学びにつながっていった例ということがいえますね。

加藤 これからの予定で、『6年生をおくる会』（3年生）という資料を2月に使って授業をしたいと思っています。内容項目は「愛校心」なのですが、これは6年生を送る会を成功させるために『翼をください』という歌を一生懸命にクラスで団結して練習するという内容です。そして、6年生から大きな拍手をもらう。その中から、学級や学校を大切に思う気持ちをはぐくむ資料になるというのですが、これと本学級の実態と合わせて、このような発展を考えました。この授業を行っ

たあと、実際に次の授業として『翼をください』を自分たちが歌うだけではなくて、この歌詞のもつ意味を自分たちに置き換えて、4年生へ羽ばたくというときに、この『翼をください』を自分たちなりにどのように解釈してどのように歌うか、その中に1年から3年までの思い出なり、高学年生との思い出なりをこめて歌っていききたい。それを、6年生を送る会の劇にして、実際に全校に発表したいと思っています。その中で、自分たちのクラスのまとまりもアピールできるようにしたいと思っています。『6年生をおくる会』の発展は、「自分たちの学級のよさを『学級新聞』などにまとめ、保護者や他の学級・学年にPRする場を設定する。」となっていますが、わたしの考える発展としては、資料と同じように劇をつくって全校に発表する場をつくるとか、あとは「愛校心」という内容項目と関連して、自分たちの学校のPRを、学校内だけではなくて全国にPRする——だから、もっと学級や学校を広げて全国とか全世界に広げる発展というか、そういう視点での発展もあり得るかなと思います。ですから、そういう横の広がり的发展と、先ほど話題になった、長い時間の系列の中での発展——そして、自分がどのように成長していくかということの糧になるような学級づくりをしていくという視点もあるかなと思っています。

別の例ですが、「節度・節制、自立」の授業のあとに、「家で手伝ったことを書いてきなさい。」と指示をしました。一人の子どもが金・土・日曜と3日分を書いてきました。金曜日は「ご飯の片づけ」、土曜日は「くつをそろえる」、日曜日は「家の整理・整とん」と表に書いてあります。最後に、感想として、「家の中がすっきりしました。気持ちいいなあ。」とありました。実際に頭で学習したことをやってみないと、実感としてわかない。それを言葉として「気持ちいいなあ。」と書いてあります。それでは「何で気持ちいいの?」と、さらにそこから大事なものは、そこは見取

りだと思うのですが、「やったことには、どういう意味があるの？」と拾い上げる、そのために言葉に残しておくことが大事かなと思います。家庭でやったことですので、お母さんやお父さんからのコメントが書いてありました。「日ごろからお手伝いはしているのですが、こちらからお願いしたらするというものでした。ここ数日のお手伝いは、『わたしも作るから。』『もっとやることない？』など、自分から進んでお手伝いをしたいという気持ちが出ていて、うれしくなりました。これからそのやる気で続けていってほしいと思います。」——お母さんも喜ぶ、自分もうれしい、気分もよくなる、やはり整理・整と

んはいいことなんだなということを体験した例だと思います。

上杉 シンプルな例ですが、これがいわゆるここで想定されている発展ですね。今の話で一つのポイントをあげるとすれば、発展の方向を教師が指示するだけではなくて、その後実際に活動が行われているかどうかということのフォローアップをしていくということ。ただ、子どもに指示しっぱなしではなく、何らかの形で教師が継続的に子どもたちのようすを見取っていくということ——必要に応じてフォローするというのがこの発展をより効果的に機能させる一つのポイントだろうと思いました。

将来の夢やキャリア形成への発展も可能

八千代市立村上北小学校教諭 大槻 純子

上杉 それでは、大槻先生、高学年にいきましょう。よろしくをお願いします。

大槻 6年生の実践なんですけど、「ともに生きる」という単元を設けて実践しました。ねらいは、「障害のある人やお年寄りと共に生きていくために、自分たちができることを見つけ、実行できることをしていこうとする態度を養う。」——最終的には態度、つまり、実践していこうとすることができればいいなと思って設定した単元です。まず最初に、命の大切さを知り、「生きる」ことは何かを考えることができてほしいという思いから、星野富弘さんを扱った『妹の手紙』という資料で道徳の時間を展開しました。資料には星野さんの絵が1枚しか出てこないのですが、もっと星野さんを知ってもらいたいと思い、教室を美術館に見立てて、絵をいっぱい展示して、授業の中に体験活動として取り入れ、より自分のこととして考えられるようにしました。星野さんを扱った資料は、星野さん自身

の生き方がたいへんすばらしいので、「不とう不屈」や「勇気」「思いやり・親切」「家族愛」などさまざまな価値で展開できます。ここでは、ねらいを「生命尊重」だけにしほった授業にしようと留意しました。終末に、子どもたちが「生きるということは何だろうな。」という思いをいただき、明日からの生活に臨んでいければと思い本時を展開しました。ここの発展は、「星野富弘さんの作品をさがして、その生き方にふれるような機会を設定する。」と副読本にはあるのですが、星野さんの本をわたしが読み聞かせてきました。その中で、何人かの子どもたちが、自分で星野さんの本を探してきたり、友達どうして貸し合ったりする活動が見られました。それからまた、乙武洋匡さんの『五体不満足』の本をもってきたり、「盲導犬」の本をもってくる子どもがいたりとか、こちらが「本をさがそう。」「本を読もう。」と言わなくても、子どもたちの中からそういう姿が自然に見られました。

そして、学級全体に紹介をし、その活動の輪を広げていきました。総合的な学習の時間の枠組みで、「車いす体験」と「アイマスク体験」と「盲導犬体験」を三本立てで行いました。「生きるって何だろう。」ということを考えて授業のあとに、さまざまな体験をすることによって、さらに子どもたちの中でその疑問が深まっていったのではないかなととらえています。体験活動のあとには、必ず感想文を書かせてファイリングをし、積み重ねていきました。その中には「車いす体験をした。想像以上にたいへんで、わたしが星野さんだったら、星野さんのようになれるだろうか。」と、体験を通じて自分と星野さんを重ねて考えることができた子もいました。また、「介護師になりたい。」とか「パピーウォーカーになりたい。」などの夢をもつ子どもがでてきました。将来の夢を見つける子が出てくることは考えもしなかったことでしたので、やってよかったなと思っていますところです。

上杉 「いっしょうけんめいに生きる」とい

主主題のもとに資料『妹の手紙』があり、指導書には、発展として「星野富弘さんの作品をさがして、その生き方にふれるような機会を設定する。」と示されています。今の先生のお話をうかがっていると、「星野富弘さんの作品をさがしなさい。」という以上に、先生が具体的に読み聞かせをなさったと……。ですから、子ども任せにせずに、具体的な読み聞かせの場面を設定した。このことが、子どもたちの意欲を喚起したというふうにとりましたけれども……。やはり、子ども任せでは、多分、子どもたちは忙しくて、やることがいっぱいあるわけで、教師が一步も二歩も踏み込んで発展の方向を示唆してやる、あるいは方向づけてやるということが必要なのかなと感じましたが、子どもたちの実態は、そのあたりはいかがでしょうか。

大槻 子どもたちは、教師が、ただ「発展だよ。」とって、これかこれを選んでやってごらんと言っても、なかなか食いついてこないことも多いと思うので、発展をどう提示する

◆主観名「いっしょけんめいに生きる」	◎児童書 P.22～25																																							
6 妹の手紙	3～2 生命尊重																																							
1 主題のねらい ●生命がかけがえないものであることを知り、自他の生命を尊重し、力強く生きようとする。 ●生命は何ものにもかへがたい、大切なものであることを知る。 ●どのように大切な生命は、自分の中にも、他者の中にも等しく一つだけ存在することを実感する。 ●生命を大切にすることは、その生命を輝かせてよりよく生きるということにつながることを理解し、そうしようとする。 2 主題設定の理由 ① ねらいについて 生命が大切なもの、かけがえないものであるということとは、だれでも知識としてはもっている。しかし、知識として知っているだけでは不十分なことがある。実感が伴ってはいない。病気になるのはじめて健康の大切さを実感できるように、生命にかかるといふことで命を通して自分の命がいっしょけんめいおもしろいように、大切に生きようとする意識が生まれる。また、他者の命に対しては命を認めるようになり、思いやる気持ちが芽生える。また、家族のやりとを通して、自分の命は自分だけのものではなく、受け継がれていくものであることを感じることができよう。 ② 児童の実態 この時期の児童は、抽象的な思考が可能となり、生命に対しても知識としての情報はたくさんのものである。しかし、核家族化や少子化、遊びの変化の影響、また、各種メディアから発信される現実とはかけ離れた生命に対する認識を余儀なくされる仮想現実的な世界の影響もあり、身のまわりの体験を通して、実感として生命を理解する機会が減少している。そのような時期だからこそ、具体的な事例を通して生命の尊厳を自覚させることが重要である。 ③ 資料について 家族の生命に対する必死の思いに引き合い、生命の危機を乗り越えた人々の声に耳を傾け、自分自身を見つめ直していくよう誘い、共感しながら考えることのできる資料である。「命や「生きる」といふことを空気や水のように生命に浸る「はく」に、どのような心機の変化がもたらされたのかを考察させたい。また、母親から妹、妹からそのお父さんや受け継がれていく生命の連続性にも目を向けよう。教室で、今まさに同じ瞬間をともに過ごしている友達・進路の異なる人の指図計画 ④ 関連の書籍……資料「妹の手紙」を読んで、話し合う。〔本時〕 ⑤ 日常生活……星野弘弘の美術館へ見学に行った。詩集を読んだりして、星野弘弘の生き方に興味をもったり感動したりする体験を共有する。 ⑥ 学校生活……国語に命に関する詩を書いたり、生きものや世話を通して命をはぐくむ体験をたたりする。	展開例 <table border="1"> <thead> <tr> <th>主な学習活動</th><th>指導の方法</th><th>子どもの心の動き</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>●どのようにおととに「生きていく」と感じるかを想起する。</td><td>●ふだんは意識して「生きていく」にスポットを当て、それが本時のテーマであることを知らせる。</td><td>○病気を思い出したとき。 ○とてもうれしいことがあったとき。 ○かけがえの命。</td></tr> <tr> <td>●資料「妹の手紙」を朗読し、話し合う。</td><td>●目には見えない命が、この資料のどこに見えるかという視点を与える。 ●命は見えなくても、あつてあつてと思っていた命の重さの気づきを促す。</td><td>○「そういえば、ふだんは命のことなんてよく考えたことはなかったな。」 ○命って見えるのかな。 ○こんなに苦しい思いはもう嫌だ。 ○生きていてもいいかな。</td></tr> <tr> <td>・「生まれてこなければよかった」と書きたときの妹の気持ち。</td><td>●命を輝かせるためのポイントには、前向きに生きようとする姿勢であることとつながる。</td><td>○自分よりつらい境遇でも、一生懸命生きている人がある。</td></tr> <tr> <td>・星野弘弘の作品を読んでから、星野弘弘の詩についてどのように感じるようになったか。</td><td>●何げなく生きていた自分自身と重ね合わせて考えさせる。</td><td>○自分も「はく」と同じように、命を空気にまいたに思っていた。</td></tr> <tr> <td>・命をあたけたいものとしてとらえていた「はく」の心境の変化。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○命をめぐらしかついていたのかも。</td></tr> <tr> <td>・妹の子どもが気持ちになつて、妹に手紙を書く。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○自分の命は自分の命でもあり、両親から代々受け継がれてきたものでもあるのだ。</td></tr> <tr> <td>●「命を大切にしよう」といふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○命をあたけたいものとして大切にしよう。</td></tr> <tr> <td>●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○自分より生きることが命を大切にすること。</td></tr> <tr> <td>●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○自分から生きるということ。</td></tr> <tr> <td>●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○あ、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。</td></tr> <tr> <td>●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○自分もそういう生き方を生きている人だ。</td></tr> <tr> <td>●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。</td><td>●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。</td><td>○今、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。</td></tr> </tbody> </table> 星野弘弘の詩集をさがして、その生き方にふれるような機会を設定する。	主な学習活動	指導の方法	子どもの心の動き	●どのようにおととに「生きていく」と感じるかを想起する。	●ふだんは意識して「生きていく」にスポットを当て、それが本時のテーマであることを知らせる。	○病気を思い出したとき。 ○とてもうれしいことがあったとき。 ○かけがえの命。	●資料「妹の手紙」を朗読し、話し合う。	●目には見えない命が、この資料のどこに見えるかという視点を与える。 ●命は見えなくても、あつてあつてと思っていた命の重さの気づきを促す。	○「そういえば、ふだんは命のことなんてよく考えたことはなかったな。」 ○命って見えるのかな。 ○こんなに苦しい思いはもう嫌だ。 ○生きていてもいいかな。	・「生まれてこなければよかった」と書きたときの妹の気持ち。	●命を輝かせるためのポイントには、前向きに生きようとする姿勢であることとつながる。	○自分よりつらい境遇でも、一生懸命生きている人がある。	・星野弘弘の作品を読んでから、星野弘弘の詩についてどのように感じるようになったか。	●何げなく生きていた自分自身と重ね合わせて考えさせる。	○自分も「はく」と同じように、命を空気にまいたに思っていた。	・命をあたけたいものとしてとらえていた「はく」の心境の変化。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○命をめぐらしかついていたのかも。	・妹の子どもが気持ちになつて、妹に手紙を書く。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分の命は自分の命でもあり、両親から代々受け継がれてきたものでもあるのだ。	●「命を大切にしよう」といふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○命をあたけたいものとして大切にしよう。	●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分より生きることが命を大切にすること。	●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分から生きるということ。	●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○あ、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。	●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分もそういう生き方を生きている人だ。	●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○今、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。
主な学習活動	指導の方法	子どもの心の動き																																						
●どのようにおととに「生きていく」と感じるかを想起する。	●ふだんは意識して「生きていく」にスポットを当て、それが本時のテーマであることを知らせる。	○病気を思い出したとき。 ○とてもうれしいことがあったとき。 ○かけがえの命。																																						
●資料「妹の手紙」を朗読し、話し合う。	●目には見えない命が、この資料のどこに見えるかという視点を与える。 ●命は見えなくても、あつてあつてと思っていた命の重さの気づきを促す。	○「そういえば、ふだんは命のことなんてよく考えたことはなかったな。」 ○命って見えるのかな。 ○こんなに苦しい思いはもう嫌だ。 ○生きていてもいいかな。																																						
・「生まれてこなければよかった」と書きたときの妹の気持ち。	●命を輝かせるためのポイントには、前向きに生きようとする姿勢であることとつながる。	○自分よりつらい境遇でも、一生懸命生きている人がある。																																						
・星野弘弘の作品を読んでから、星野弘弘の詩についてどのように感じるようになったか。	●何げなく生きていた自分自身と重ね合わせて考えさせる。	○自分も「はく」と同じように、命を空気にまいたに思っていた。																																						
・命をあたけたいものとしてとらえていた「はく」の心境の変化。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○命をめぐらしかついていたのかも。																																						
・妹の子どもが気持ちになつて、妹に手紙を書く。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分の命は自分の命でもあり、両親から代々受け継がれてきたものでもあるのだ。																																						
●「命を大切にしよう」といふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○命をあたけたいものとして大切にしよう。																																						
●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分より生きることが命を大切にすること。																																						
●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分から生きるということ。																																						
●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○あ、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。																																						
●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○自分もそういう生き方を生きている人だ。																																						
●命を大切にしようといふことばのうたを話し合う。キーワードを提示する。	●命の連続性、受け継がれていく気持ちなどに焦点をあてる。	○今、あの人も僕ながら一生懸命生きている人だ。																																						

出典
編集委員会

78

79

かが、やはり問題なのかなと、特に高学年では思います。子どもの願いとか思いや必要性に合致すれば、子どもは自ら進んで選び、活動をしていくと思うのですが、そうでなかった場合も考えられるので、これでいえば、意図的に読み聞かせをして興味をもたせるとか、あとは本を読ませたいと思うならば、教師がいっぱい本を用意してあげるとか、そういう手立てがやはり必要なのではないかなと思います。

上杉 その後の子どもたちの活動のようすは、今うかがいましたが、それは先生が想定された範囲でしたか、それともそれ以上の効果が得られたとか……。

大槻 将来の夢を見つけることができた子が出てきたことは、それ以上の効果でした。キャリア教育の必要性が叫ばれている中で、道徳の時間を通じて、夢や目標を見つけることができた子が出てきたことはたいへんうれしく思っています。また、「盲導犬体験」のときは、ゲストティーチャーとして、実際に子どもたちが住んでいる学区の中で、盲導犬を飼っているNさんをお呼びして道徳の授業を展開しました。授業が終わったあとに、「今までは見たことはあったけれど、話しかけることができなかった。でも、授業でNさんが何を僕らに望んでいるかがよくわかったから、今回は声をかけることができたんだ。」と報告してくれた子もいました。また、別の子は、道に迷っていそうだなということを見取って、「どうしましたか？」と、まず声をかけることができたそうです。このように、直接手助けをすぐに行うのではなく、「どうしましたか？」という言葉かけることも大切なんだと、別の道徳の時間で「思いやり」について勉強したあとだったので、その実践が学校外でもできたのだなと感じました。

上杉 先生が実践されたこと、あるいはこれから予定されていることで、何か別の発展のしかたというのがいくつかあれば紹介いただきたいのですが……。

大槻 道徳があってさまざまな発展の活動があるのですが、道徳が道徳に発展することがあっていいのではないかなと考えます。というのは、「生命尊重」と「思いやり・親切」が関連したりとか、「勇気」が「誠実・明朗」と関連したりとか……。道徳と道徳とのつながりというのも計画的に行っていききたいなと思っております。

上杉 先ほど、中学年で加藤先生におうかがいしたときに、次の道徳の時間への発展ということと、その授業が終わったあとの生活への発展という2つの視点が示されましたね。今の大槻先生のお話ですと、道徳の授業が相互に何らかの形で連続性をもっていく——子どもたちの学びの連続性を保証していく——とか、授業から授業への発展ということも一つの考えていい視点かもしれませんね。

大槻先生、『心のノート』の活用で何か事例がありましたらお話してください。

大槻 高学年の『心のノート』に、「自分向上プロジェクト」というページがあります。5年生のときに、道徳の時間に記入しました。そして、6年生で副読本『自分の色』の授業のあとに書いてみました。5年生のときからの成長のようすもわかるし、さらに今の自分についても、『心のノート』と副読本の資料にリンクさせながら考えることができたなと思っています。発展として『心のノート』を活用していくことの有効性を実感しました。

これは直接、副読本の資料とは結びつかないことですが、よろしいでしょうか。

昨年度の3学期に、わたしが受けもっていた6年生の学級に、上杉先生に授業に来ていただいて、子どもたちに職業についての授業「ハローワーク入門」をしていただきました。そのあとに、子どもたちは、職種について興味をもつようになりましたので、8時間の総合的な学習で「キャリア教育」の単元を組んで授業を展開しました。上杉先生の授業をきっかけに総合的な学習の単元が始まったわけですが、道徳で勉強したことによって、子ど

もたちの職種を見る観点がすでに培われていたので、たくさん職業がある中で、「わたしは〇〇が好きだからこの職業がいい。」という選び方ができるようになっていました。道德の授業をするまでは、「この職業は△△だからわたしに向いている(向いていない)。」という選び方でしたので、道德の授業を経て子どもたちが大きく変わったのがよくわかりました。職業の見方や選び方が必然的に最初の段階よりできるようになっていたのも、すごく中身のある単元を組むことができました。最終的には、小学校6年の卒業前の段階で、はっきりとした理由をもって、そして夢ももって卒業していくことが全員できました。それも上杉先生の展開してくださった道德の授業があったからだなと、あらためて思っております。上杉 その授業は、わたしが飛び込みでやらせてもらった授業なんですけど、むしろそうい

う意味でいえば、発展を強く意図した授業であったといえます。学習指導要領の中で、道德の時間というのは「補充・深化・統合」という機能を果たすと規定されていますね。この「発展」という考え方は、もしかしたら、「補充・深化・統合」プラス「発展」というぐらいの大きな意味をもつものなのかなと、わたしは今考えておりまして、道德の授業がきっかけになって、子どもたちがそのあとにさまざまな活動を展開しやすいように構成する、その起点に道德の授業が位置するということがあってもいいのだろうと……。そういう意味でいえば、むしろ、道德の授業を充実させるということもさることながら、その先の子どもたちの学びや暮らしが広がっていく、そこに思い切って重点をかけた展開というのが、今後さらに強調されていくのかなと思います。

★インタビューを終えて★

学校教育の一種の宿命なのだが、教師の合図がないと授業が始まらない。それはまぎれもない事実であるが、とりわけ生活と密着し、いたるところに課題が存在する道德教育においては、その宿命をにわかには受け入れがたい。

できることなら、日々の暮らしの中で、立ち止まり、見つめ、じっくり考えるような、だれにも強制されるのでもない自然な学びを期待したい。教師のだれもがそんな願いをいっているのではないか。

このインタビューでは、優れた3人の実践者に参加していただいた。

福田さんは、「授業が終わったからといって(そこで出会った人と)別れるわけにはいかない」と語ってくれた。そこでは、授業は永く続く確かな出会いを生み出す機能を果たしている。

加藤さんは、積極的に家庭にはたらきかける実践とその結果を紹介してくれた。そんな

担任の熱意に応えて、保護者もまた子どものようすを克明に伝えてくれる。

大槻さんもまた、授業後の発展の選択肢を多様に示し、子どもたちを具体的な実践へと導いている。決して子どもたちを信用していないのではなく、授業終了後に向けて積極的なメッセージを発信しているのである。

これらの実践が示唆することの一つは、道德授業という営みが、子どもたちの生活の中で、点から線へ、線から面へという学びの広がりをもたらす大きな可能性を有しているという事実である。そして、学びの広がりに向けて担任がそっと背中を押してやるだけで、子どもたちもまた、文字通り「発展」的な学びを生き生きと続けるという事実である。

暮らしの中に息づく学び——それが決して手の届かない理想なのではなく、教師のはたらきかけしだいでは、きわめて実現性の高い願いなのだという確信を得ることができた。

道徳的価値を見出す視点を 家庭にも伝えよう

八洲学園大学教授 渡邊 達生

道徳的価値については、教員のみならず、家庭の人たちにもその理解を求めることが必要ではないか。特に、「主として自分自身に関すること」の育成にあたっては、それを強く感じる。保護者会等の機会を活用して、各家庭が道徳教育にかかわれるよう、道徳的価値についての理解を深める学習会を催したい。以下は、そのときの提案例である。

【節度】節度とは、日々の生活に節目をつけて健全な生活をしようとする心である。それによって、毎日が快適に過ごせるようになる。夜更かしをしないで、決めた時刻に寝る。そして、決めた時刻に起きる。自分で、洗面、トイレ、着替えをする。このような規則正しい生活が自立の芽を養うことになる。また、髪をカットに行ったら気分もカット。洗い物を念入りに洗って心もきれいに。小箱を使って机の上や引き出しの中を整理整頓。室内に花や写真を飾って部屋の模様替え。これらも、節度ある生活の視点として大切である。イライラ感やストレス感を解消してくれる。それが、子どもに規律ある態度を備える。

【規律】規律とは、自分の生活に「きまり」をつけてそれを守ろうとする心である。「食事のときにはあいさつをする」「くつをそろえる」「勉強が終わったら机の上を整理する」というように自分の在り方を自分で意識して守ることで、すがすがしい気持ちになり、日々の生活に充足感が生まれる。しかし、どうしても、規律を踏み外すこともある。それは人間であることの証でもある。そこで、反省が生まれる。

【反省】反省とは、自分の過ちを素直に省みて、その失敗をそれからの生活に生かそうとする心である。過ちとは「過ぎた」のである。食べ過ぎ、遊び過ぎ、がんばり過ぎ、言い過ぎ、泣き過ぎ、等々。これらを、どうしたら程のよいところで止めることができるか。反省はその起点となる。反省で気は落ち込むが、それは自分に正直であるからでもある。

【正直】正直とは、自分の気持ちに素直に従う心である。人は「よいこと」をしたいという気持ちを心の底にいだいている。それに基づいて、守るべきは守る、謝るべきは謝る、秘密にするべきは秘密にする。そのように、自分の気持ちに素直になることに安心感を与えよう。「うそをつかない」ことはそこから派生してくることであって、正直の第一義ではない。「ありがとう」「ごめんなさい」「わたし、こんなことを考えている」と、自分の気持ちが素直に言えるとき、家庭が安心できる場所となっている。そこに明朗さが出てくる。

【明朗】明朗とは、いやなことに出会っても暗くならず、明るくふるまおうとする心である。人は思い通りにならないときのほうが多い。失敗する、叱られる、将来に展望がひらけない、等の状況では暗くなりがちになる。そのようなとき、気持ちを切り替えて前を見ようとする姿勢は、一人ではできなくても、家族ではできる。「今日は焼肉にしようか。買い物につき合ってくれる?」「おもしろいニュースがあるよ。」「この本、読んでみる?」——家族を明るくしてあげようとすることで、自分にも明るさが訪れる。そして、希望が生まれる。

【希望】希望とは、自分を未来に向かわせようとする心である。それは、自分の願いを明らかにすることによって芽生える。字が上手に書けた、うまく工作をつくることができた、もっと本を読みたい、お母さんが喜んでくれてうれしい、等々の場面をつくり出すことが、こんなことをしてみたいという希望をふくらませる。それが努力する力を生み出す。

【努力】努力とは、つらいことやいやなことに出会っても目標に向かってがんばる心である。家族の温かい声援や励ましで、がんばることができる。音読の練習、漢字の練習、計算の練習、なわとびの練習、たて笛の練習、マラソンの練習等々に、つらいことやいやなことはあるが、それを乗り越えたとき、つらさは、逆に、自信を与えてくれる。また、それは正しい目標に向かう自分に価値を感じたときでもある。それが正義である。

【正義】正義とは、どうすることが正しいのかの判断をして、その正しさを実現しようとする心である。何が正しいかは、その時と、場所と、状況を的確に把握することによって決められる。人から言われたので……、人がしているので……、本に書いてあったので……、等々が正しさの拠り所では、自分の正しさへの判断力は無いに等しい。そのとき自分は何を考え、どうしてそのようにしたのか、というように自分を見つめる体験を繰り返すことによって、正しい判断力が身についていく。それを、実現しようとするとき、勇気が必要になる。

【勇気】勇気とは、自分を励ます心である。自分のしようとしていることが、「人のためになることだ」「よいことだ」という気持ちだが、「はずかしい」「いやだな」という気持ちを乗り越えさせてくれ、自分を奮い立たせてくれる。電車でお年寄りに席を譲ったよ、学校でおおぜいの人に発表したよ、わからないことを先生に聞くことができたよ、道で車椅子を押してあげたよ、等々の勇気ある行為ができたという自覚は子どもをいちだんと成長

させる。しかし、勇気は、むこうみずな行為ともなりやすい。そこには、誠実さが必要となる。

【誠実】誠実とは、自分のあるべき姿を実現しようとする心である。「字が上手になりたいので字の練習をしよう」「体力がないので早起きしてマラソンの練習をしよう」「お母さんは病気がちだから助けよう」等々、自分のあるべき姿を思い描き、それを実現しようとする行為は、家族の胸を打つ。家庭がよい環境に包まれる。そこに自由を取り入れたい。

【自由】自由とは、自分の考えを行動に表そうとする心である。何をするか、どのように調べるか、どのように計画するか、どのように練習するか、どう仕上げるか等々、自分の意志を精いっぱい実現しようとするところに自由のよさがある。「この図工の作品、すばらしいよ。玄関に飾るね。」「お手伝い、ありがとう。びっくりしたよ。力が強くなったね。」——このようなひとことが、子どもの主体性を促していく。それがまた、創意・進取の気概を生み出す。

【創意・進取】創意・進取とは、進んで新しいことを取り入れ、工夫して生活をよりよくしようとする心である。物を整理する箱を空き箱で作る、勉強時間を工夫する、ペットボトルを「鉛筆立て」や「花瓶」にリサイクルする、家族の誕生日にカードを贈る、等々の小さな工夫が生活を楽しくしていく。そして、それによって、個性が表れてくる。

【個性伸長】人はみな顔や性格が違うように、それぞれに違うものを持ち合わせている。個性伸長は、それを自分のよさとして伸ばそうとする心である。短所を改め長所を伸ばすという発想からではなく、短所も長所の表れとして見る。すぐ涙ぐむのは深い感受性をもっているから、作文がなかなか書けないのは考えをいっぱいため込んでいるから、短気なのは元気があり余っているから等々、よいところとして認めることで、それを生かそうとする成長が始まる。

誰にでもできる道德の授業をめざして

——『子どもに学ぶ道德教育』を念頭に置ながら——

十和田市立南小学校教諭 沢田 真也

1. 会員・組織

本研究会は、「上北地方小学校教育研究会道德部会」という名称で、青森県十和田市・三沢市・上北郡の小学校教員からなる任意団体である。

平成17年度は、下田町立木ノ下小学校の川村正校長を部会長に迎え、61名の会員で活動が続いている。61名の中で、教科と道德に関連させて指導したいと考え、他教科の部会と兼ねている会員が約半数の32名で、ほぼ例年通りの数字である。

組織としては、部会長1名、副部会長数名、理事10数名、市部と郡部の地区役員数名、事務局2名、幹事1名からなる。

管理職以外の理事10数名が、研究部を兼任し、研究組織の母体となり部会をひっぱっている。それ以外は一般会員となっている。

研究会の成り立ちとしては、創設された時期は特定できないが、昭和39年に上北小学校が地方初の文部省指定校となり、「読み物を利用した道德指導の展開」の研究成果を発表したことに端を発していると考えられる。昭和50年代半ばに文部省指定校と部会がタイアップして発表に向かった記録があるので、昭和40～50年代は発表校に指定された小学校の拡大校内研に参加し、協力していく体制をとっていたようである。

現在の部会の原型ができあがったのは、昭和50年代末から、平成の初めにかけてである。それまでは、校長、教頭の管理職中心の会員構成であったが、元横浜町立大豆田小学校校長の高田巽部会長のときに、20代から30代の若手教員を多数集めることで、若返りが図られ

た。

この時期は、ベテランと若手のバランスがたいへんよく、ベテランの指導を受けながら、若手が全国大会、東北地区大会、県大会、地区大会等で精力的に実践発表を行った。

実践集『子どもに学ぶ道德の指導－誰にでも出来る道德の授業をめざして－』（本稿タイトルの由来）第1集・第2集を続けざまに発刊し、管内すべての学校に配布する活動も行った。

最近数年間は、現横浜町立南部小学校長の山内康之部会長の指導のもと、月例会での研究や長期休業中に行われる研究発表会を充実させてきた。平成15年度には、10年ぶりに実践集第3集（郷土資料集）を発刊した。

また、現八洲学園大学教授の渡邊達生先生に何度も足をお運びいただき、示範授業とご講演をしていただいたことで、研究発表会が100名を超えて行われることが珍しくなくなり、部会員以外の参加も増加しつつある。

2. 年間の活動

①月例会での学習会

・実践発表、協議 等

②夏季・冬季休業中の研修会開催

・授業公開、協議会、学習会、講演 等
・一人一実践の発表

③研究指定校拡大校内研への参加、協力

④各校校内研の助言者、講師としての参加

⑤県小学校道德資料研究会への資料の提供

⑥文部科学省等、中央の研修の伝達講習会

⑦上北地方小学校教育研究会研究紀要『やませ』への寄稿

3. 研究の変遷

初期の部会は、道德指導過程の基本的構造等を、高名な研究者の文献を参考にしながら研究していたようである。道德教育が難解なものにとらえられていた時代背景もあり、なかなか一般化されていなかった。

昭和50年代末ごろから『ひらがな道德実践論』として、学ぶ子ども側に立って、子どもの行為・行動・見方・考え方に即して、実践を積み重ねることが多くなった。「子どもに学びながら、子どもと一緒に生きて、生き方（道德的な価値）を追求する授業を創り出そう」ということが、20数年間研究の骨子となり続けている。その考え方をもとに、下記のように研究主題を設定し、部会員でなくとも、誰でもできるむずかしくない道德授業の一般化をめざして、研究を続けてきた。

読み物資料を活用して、道德的心情を深めるための指導は、どうあればよいか

資料は、副読本を中心とし、「発問の工夫」に焦点をあてて、実践事例の発表をした。「資料分析」にも力を入れて、取り組んだ。

家庭・地域と関連しながら道德教育を推進するために、学校・地域行事と価値項目との関連表を作成することを行った。

平成11年度より、「総合単元的道德」にも取り組み、主題を下記のようにした。

人間として、よりよく生きていく力を育てる道德教育（副題が上記の主題）

その後、副題を「道德的心情・判断力を深めるための指導はどうあればよいか」と変え、体験活動と関連させながら道德的实践意欲や態度を育てる指導法の研究を行った。読み物資料の活用だけでなく、役割演技、動作化、観察や調査、視聴覚教材の利用、ゲストティーチャーの活用等、多様な展開を試みた。仮説検証のための研究以外にも、郷土資料の作成・収集には10数年にわたって、現在も取り組んでいる。

4. 今年度の研究

このように20～30年間にわたって、地道な活動を行い、地方の先生がたにも時流を反映した実践事例を発表し続けてきた。

この間、百石町立百石小学校、三沢市立三沢小学校、上北町立小川原小学校等、数校が文部省の指定校となり、そのつど部会も参入してともに研究する機会をもつことができたが、それ以上大きな研究会が開かれることはなかった。それが、ついに平成20年度東北地区大会の開催地として選ばれ、今年度は、その大会に向けて、いろいろな面を見直しているところである。

今年度は、研究主題も下記のように大きく変わった。

「確かな学力」を支える道德性の育成をめざして

「生きる力」を身につけさせていくうえで、道德教育は「豊かな人間性」育成の部分で大きくかかわっているが、今、叫ばれている「確かな学力」の育成は、「豊かな人間性」が育ってこそなされるものだと考える。「確かな学力」と「豊かな人間性」の関連を道德教育を通して明確にしたいというのが、その主旨である。

そして、「道德の時間は正解がない」という考えを否定し、体験的な活動と「道德の時間」を有効に結びつけて論理力をつけていこうということと、「主体性」を育成するために必要な内容項目を洗い出し、教科・領域とも関連づけて有効に指導する方法を整理するという二点を重点とし、仮説にも反映させた。

これは大雑把なもので、これから話し合っていく中で、次々と改善されていくと考える。

最後に、研究主題は変わろうとも、「子どもに学びながら、子どもと一緒に生きて、誰にもできる授業を創り出していく」精神は、これからも忘れずに受け継ぎ、上北地方の道德教育の発展のために、努力を続けていこうと考えている。



Q：道徳の授業が、いつも同じような展開になりがちです。もっと多様な授業にチャレンジしてみたいのですが……。

A：「いつも同じような展開」ということですが、一般的に道徳の授業は4段階の展開となることが多いようです。

それは、①学習の方向づけをし

②価値を深め

③価値を自覚し

④実践意欲を高める

というステップの中での子どもの心の高まりを期待しているからです。

このステップを大切に、しかも1主題1単位時間で学習展開していこうとすると、どうしても（そういう授業もあってもよいが）教師主導の授業になりがちです。

例えば、①導入——「～について考えよう」

②資料を読んで——「どうして～なのでしょう」

③ワークシート——「あなたは、どう思いましたか」

④まとめ——「これからは～しましょう（しません）」

というパターンで展開していけば、子どもの実態がどうであれ、指導内容や提示資料が何であっても、道徳の授業らしくはなります。

そのあたりが「いつも同じ……」と感じるところでしょう。指導する側がそう感じるとしたら、子どもたちももっと「いつも同じ……」と強く思ってしまうかもしれませんね。



Q：道徳の授業がパターン化しないためには、どのようなことに気をつけたらよいのでしょうか。

A：まず、「主題のねらい」と「子どもたちの実態」との関係をしっかり把握しましょう。そのうえで、どのような学習活動で授業を構成していくかを考えていけば、おのずから多様な授業展開が生まれてくるはずです。

○「ねらい」を通して見る子どもたちの人的環境や社会的環境はどうか。

○子どもたちの本音を引き出す手立てはどうするか。

○資料との出会いをどのようにするか。

○他教科や他分野と関連づけられないか。

等々を、子どもたち一人一人の顔を思い浮かべながら考えるところから授業が始まっていると思ってもいいのではないのでしょうか。



Q：多様な学習展開の例としては、どのような授業が考えられますか？

A：子どもの学習活動のようすで考えてみると、次のような授業形態が見えてきます。

◇教師主導の授業——子どもたちの心の高まりのステップを確認しながら学習展開することができます。

◇問題解決的な授業——子どもたち一人一人が問題点を設定し、追究していく授業です。

まず自分たちができること・改善できることから実践していくことができます。

- ◇**資料が中心の授業**——資料との出会いを大切にしていくな授業です。読み聞かせを取り入れたり、名作をじっくり味わう授業があってもいいのではないのでしょうか。また、ゲストティーチャーの話や取材での聞き取り等も資料と考えたいですね。
- ◇**活動に取り組む授業**——事前活動での取り組みから授業展開したり、授業後の実践活動の時間を保障したりする多時間扱いの授業です。また、資料に示されている行動場面を実践してみて、心情に共感させたりすることもできます。
- ◇**他と関連する授業**——生活科や総合の長いスパンの学習活動等と連携する授業です。各教科の学習単位にも関連づけることができます。自分たちの学校生活・家庭生活・社会生活を見つめ直すという視点で関連づけていきます。
- ◇**話し合い中心の授業**——主題に関する内容をテーマとした討論会やディベートを企画して行ってみる授業です。話し合いにある程度の約束ごとが必要です。高学年向きです。

そのほか、『心のノート』と関連づける展開も考えられます。

いずれにしても、道徳の授業は、教師も子どもたちも「道徳だから、こうしなければ……」と考えずに、多様な学習展開を体験し、子どもたちが生き生きと活動する中、子どもたちと本音で語り合えるような場でありたいですね。

「体験活動を取り入れて家庭・地域へと広げる授業展開」の例

15 あいさつって なあに

1 きくは、じゃーん、元気いってばい。

（元気？）

あつたかに、あいさつって、かわりたら、きくうー、目、開いて、すぐさうなうん。

3 つきの、日は、こうだった。

「はい、元気です。おはようございます。」

「あつたかに、あいさつって、かわりたら、きくうー、目、開いて、すぐさうなうん。」

2 ある、日、あかあんに、かみのか、のたまにだん。

「はい、元気です。おはようございます。」

「あつたかに、あいさつって、かわりたら、きくうー、目、開いて、すぐさうなうん。」

4 それから、こんな、ことを、思った。

「はい、元気です。おはようございます。」

「あつたかに、あいさつって、かわりたら、きくうー、目、開いて、すぐさうなうん。」

「総合的な学習の時間と道徳の時間との関連を図る授業展開」の例

[illegible][illegible][illegible]

▲上…「あいさつって なあに」(2年)

下…同上(指導書・別案の展開例)

▲上…「学校紹介のホームページ」(5年)

下…同上(指導書・別案の展開例)

学習指導要領準拠

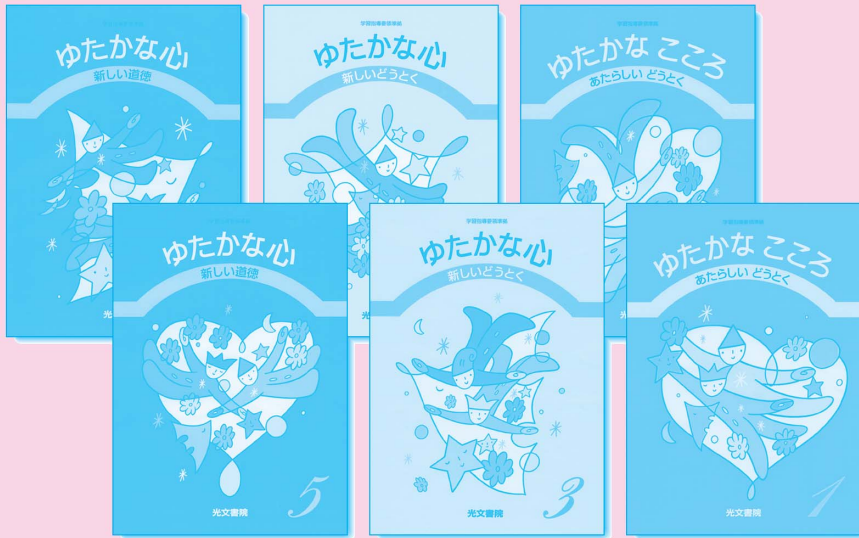
平成17年度
改訂新版

『ゆたかな心』

〔淑徳大学名誉教授 新宮弘識
千葉大学大学院教授 上杉賢士 監修〕

〔旧／『新しい道徳』〕

——「新しい時代に対応した人づくりの教育をめざして」——



◎新資料の開発・掲載

◎児童書は全学年フルカラー

◎豊富な写真・イラストでよりビジュアルに

◎紙面構成を「縦組みから横組み」に

☆新生「横組み・道徳副読本」にご注目ください☆

◎子どもの活動を促す「発展」を提示

・授業後の子どもの活動を促す「発展」を指導書に提示し、児童書の末尾に子ども向きの表現で掲載しました(3～6年生)。

◎『心のノート』との響き合いを大切に

・『心のノート』との関連も図り、『心のノート』と道徳の授業との響き合いにも力を注ぎました。

◎道徳学習に役立つ「コラム」を掲載

・「資料と関連したコラム」「情報的なコラム」「スキルのコラム」などを各学年に6～9項目掲載しました。

○1年生……「じかんは じょうずに つかおうね」「なかまを ふやそう」「だいじな いのち」など

○2年生……「サイコロトーキングで たのしもう」「いのち いきいき、パワー ぜんかい!」

「ともだち つくろうフレンドチェーン」など

○3年生……「歌っておぼえる 楽しい手話」「盲導犬になるまで」「くらしをまもる—消防士のしごと」など

○4年生……「ことわざ＝言葉の技」「すてきな家族《読書ガイド》」「何て書いてあるのかな【点字】」など

○5年生……「オリンピックの歴史」「世界遺産」「障害のある人への介助の方法」など

○6年生……「わたしたちの学校〈標語集〉」「人にやさしい社会〈福祉について〉」「使っていませんか? おかしな敬語」など

◆子どもの道徳 85号 ●編集／「子どもの道徳」編集委員会 ●発行者／長谷川知彦

●発行所／株式会社 光文書院 〒102-0076 東京都千代田区五番町14 ☎03-3262-3271

●表紙／北川デザインスタジオ ●組版・製版／(有)マウント企画 2006年1月・200円(消費税込み)

<http://www.kobun.co.jp/>／『ゆたかな心』のコーナーもあります)